

2013.10.15 / Vol.43

1880年代教育史研究会 ニュースレター

第43号

目次

[連載]

- 神辺 靖光 「学校をめぐる逸話と風景(17)
江戸藩邸と明治初期の校舎」…………… 2

[個人研究]

- 谷本 宗生 「第一高等中学校入学試業科目の
画期(1888年)について」…………… 3

- 谷本 宗生 「第一高等中学校入学試業科目変更の波紋について
——幸田成友の回顧録から——」…………… 5

- 田中 智子 「再び森有礼へ
——佐藤秀夫氏の所論を素材に——」…………… 7

[図書紹介]

- 富岡 勝 木野主計『木下鞆村の生涯とその魅力』について…………… 8

- [お知らせ]…………… 11

[連載] 学校をめぐる逸話と風景 (17)

江戸藩邸と明治初期の校舎

神 辺 靖 光

今回は幕末維新期に江戸藩邸に私塾が入り込んで、それが私立学校になる例をあげた。慶応義塾が鉄砲州の中津藩邸から芝新銭座の久留米藩・有馬家中屋敷に移って近代私学の雄になったことは広く知られている。明治初期の官公立学校も江戸藩邸や武家屋敷で呱呱の声をあげたのである。

東京大学の前身は開成学校であるが、その淵源は幕府直轄の蕃書調所である。安政4(1857)年、九段坂下の幕臣・竹本図書頭屋敷(現千代田区・地下鉄新宿線九段下駅南側)に開校した。その後、一時、小川町の松平近直屋敷(現神田古書店街北側)に移ったが、文久2(1862)年、一ツ橋門外の火除地(通称・護持院原、現毎日新聞社から如水会館、共立女子大学一带)に校舎を新築し、翌年、開成所と改称した。新政府の開成学校はこれを摂取したのである。

東京大学医学部の濫觴は安政5(1858)年に開設した種痘所である。神田お玉ヶ池の幕臣・川路聖護屋敷(現JR神田駅東・紺屋町あたり)に開かれた。翌年、火災のため、下谷和泉橋通りの武家屋敷(現台東区台東一丁目あたり)に寓居したが、明治元(1868)年7月、神田和泉町に盤据した津藩・藤堂家(32万石)の上屋敷(現JR秋葉原駅東隣・神田和泉町一带)に入居し、病院と校舎を建てた。これが幕府医学所→大学東校→東京医学校である。

帝国大学工科大学の前身・工部大学校のそのまた前身・工部省工学寮は明治4年8月、虎ノ門内延岡藩・内藤家上屋敷(現千代田区霞ヶ関・国立教育会館あたり)に洋風の校舎をたててはじまった(『東京大学百年史・通史I』)

現東京都立日比谷高校につながる東京府中学は明治11年9月、本郷元町の旧高松藩邸・讃岐松平家中屋敷(現JR水道橋駅東北側)に開校し、翌12年9月、表神保町の旧高田藩榊原家上屋敷(現千代田区一ツ橋から錦町にかけて現小学館ビルから学士会館あたり)に移った。また、これも日比谷高校につながる府第二中学は同年同月、幸橋見付内の東京府庁構内に開校したが、この地は元大和郡山藩・柳沢家上屋敷(現日比谷公会堂の筋向かい、第一勧銀内幸町ビルあたり)であった。

以上述べたうち、開成学校と工学寮は新築校舎だが、幕府医学校→東京医学校や東京府中学や第二中学は藩邸を改造してつくったものである。

前回述べたように藩邸は概ね方形の敷地の周囲を長屋で囲み、中にはまた棟割り長屋を置き、ほぼ中央に藩主が住む御殿を置く。明治初期の新校舎はその一部を壊したり、改造して職員室や教室、寄宿舎にした。下図は東京和泉町にあった東京医学校の校舎略図である。この屋敷、元藤堂藩邸は周囲に二間堀がしつらえてあった。その内側に江戸詰下級武士が止宿する長屋があった。その一部を取り壊し或は一部を寄宿舎としたのである。東側の病室は元お局長屋、即ち奥女中が住んだ所である。侍が住む長屋より上等にできている。式台つきの玄関がついた一閣が藩主の住んだ御殿で、ここの各室が、教師室や講堂即ち教室になった。高田藩邸榊原屋敷は破風作の玄関から入って御殿表座敷から長局までを教室にした。各部屋を三間、三間、約9坪18畳ぐらいに区切り畳を上げて床に洋式の机、腰掛けを置いた。部屋の境は胡粉張の大襖、廊下は幅二間

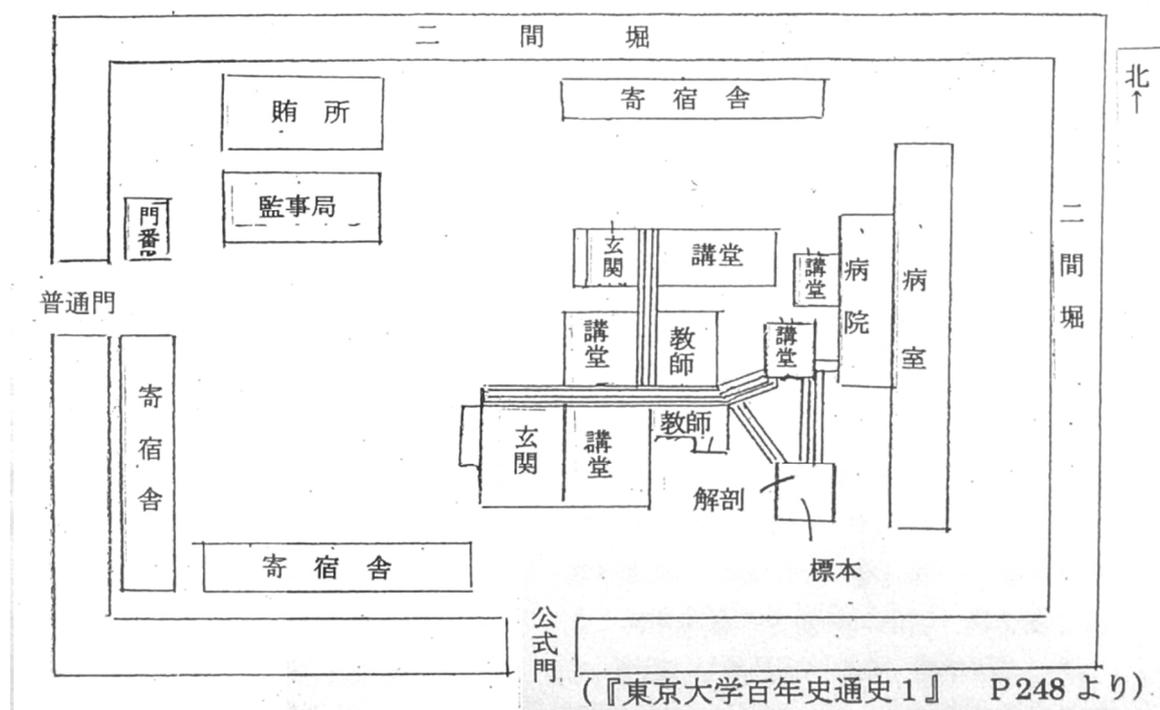
ほどの広さで天井は高かった。庭は大名屋敷時代のままであったらしく、松檜の喬木繁茂し、假山の跡、池塘の名残があったと言う。ただ部屋と庭を遮る障子は硝子張りであった。

郡山藩邸柳沢屋敷の第二中学は高雅の風はなく、庭に樹木もなかった。左右の長屋をそれぞれの10室に区切って教室とし、一方を師範学校が、一方を中学校が使用した。道路沿いは旧藩邸時代の御物見出格子板壁、

教室の境も大襖または杉戸であったが、内側の障子はガラスに替えられた。

要するに藩邸屋敷をそのままに、部分的にガラスを嵌めたり、洋式机、椅子を持ち込んだりしたのである。

明治6、7年頃 東京医学校校舎図面略図



[個人研究]

第一高等中学校入学試験科目の画期（1888年）について

谷本宗生

筆者・谷本は、英文学者・戸川秋骨（1870～1939年）の随筆「三十余年前の学校生活」『文鳥』（1924年）を読んで、青年期の戸川が第一高等中学校を1888年に受験して、残念ながら最終的に不合格となった事情を知った次第である。

…高等中学の試験を受けに行つた。…その年から一明治二十一年と記憶する一試験が非常に面倒になつて、あらゆる普通学を試験される事になつた。

（『戸川秋骨人物肖像集』41頁所収）

戸川がいう入試科目の変化については、受験者からするとやはり重大な問題であったと思われる。1887年の第一高等中学校入試では、予科第三級入試科目は(1)倫理(2)国語及漢文(3)第一外国語(4)数学、に加え、体格検査を実施して判定されるとした。戸川も受験したという1888年の入試を境にして、第一高等中学校入試の在りかたが改められたといえる。予科第三級級の入学試験を三期に分けて実施するとされた。第一期では、算術、代数と第一外国語を実施して、それに合格したものが続く第二期を受験するとした。第二期では、平面幾何、倫理、国語及漢文、地理、図画を実施して、それに合格したものが続く第三期を受験するとした。第三期では、歴史、博物、物理、化学、体操を実施して、さらに合格したものは体格検査を受けるとした。このような三期にわたる入試の狙いには、全国各地から集った1千名以上の受験生らを2百名ほどの合格者に選抜する篩いの機能が期待されたことが大きいといえる。

戸川ら受験者からみると、たしかにこの年から突然入試科目が増えたと感じるのは当然であるが、実はそれ以前の規程上で唱歌は当分欠くとし、地理、歴史、博物、物理、化学、習字、図画、体操を予科第三級入試では省くとされていたのである。それが、1888年の入試から省かれていた科目がようやく実施されたわけである。文部省側も、その点には配慮していた経緯がうかがえる。1888年の『官報』には、第一高等中学校予科第三級入学試験科目について事前に告知がなにかされている。『官報』1463号(1888年5月18日)には、日本地理、アジア及ヨーロッパ地理、日本歴史、万国歴史、博物、物理、化学の例題が示されている。

受験した戸川の証言のなかでとくに興味深いのは、第三期の入試まで進んだ戸川が体操によって、満足な

体操科課題をクリアできなかったことが不合格の原因とみている点である。

併し体操に至ってはどうすることも出来ない。まあ併し何とかなるだらうと思つて、その体操の試験なるものを受けて見た。当時の高等中学校は一ッ橋の丁度商科大学の向側にあつて、体操はそれから筋交ひの…広い空地でやることになつて居た。その体操場に行つて列に加つて見ると、その時の有名な校長木下広次氏以下大勢の先生が監視の格で立つてゐる。私はどう手を動かすのか、足を上げるのか全く不知案内であつたので、号令の出る度に、前の人のやる通りに身体を動かしてみた、随分変な図であつたらうと思ふがどうも仕方がない。…どうもうまく行かなかつた事は自分にも良く分つてゐる。又うまく行かないのが当然なのである。で少々落胆して帰つて来たが、イヤ第三期の試験といふは只名目ばかりで、あれで落第させる筈はないから安心しろと云つてくれる人が一二に止らないので、扱は左様かと自分でも考へて多少の望を掛けてゐたが、期日になつて行つて見ると、果して自分の名はなかつた。

(『同上書』42～43頁)

1888年の入試から第三期制が導入されたため、成立学舎などの受験予備学校に通っていた戸川らですら、入試科目としての体操科の情報を十分に確認しそこなっていたものと思われる。体操科の入試細目(普通体操 矯正術の内三ッ、球竿体操 半ハ迄、兵式体操 生兵学第一部第一章第一教第二教、柔軟演習第一章第一教ノ内二ッ第二教ノ内二ッ)についても、『官報』1511号(1888年7月13日)に事前告知されている。体操科についても、受験生としては他の入試科目と同様に

相応の準備や心得をしておく必要があったものと思われる。戸川のようにとくに自信がない科目については、それを専門に教授する私立学校で重点的に履修しておくことも、受験生としての選択であったといえる。第一高等中学校などを受験する青年子弟らにとって、合格するためには受験情報雑誌（過去問題・予想例題）を十分に利用するだけでなく、実績のある受験予備学校で数ヶ月間以上は集中的に学び、受験対策をしっかりと行うことが必須であったろうと思われる。新聞などの告知欄で、第一高等中学校への合格者数を競って宣伝する受験予備学校が多くみられたこともそれをよく物語っている。

戸川の回顧録も、第一高等中学校受験者らの多くの回顧録や自伝などと同様な1つと速断していたならば、入学試験科目の変化・画期をおそらく見逃していたで

あろうと思われる。体操科の入試科目が1888(明治21)年に行われたという記述に今回着目したことにより、その変化を意識的に捉えることができたといえる。ワンピースから、教育史上で重要な事柄が判明することがある。さまざまな関係史資料の悉皆調査と、素朴な疑問や新たな気付きという問題意識の不思議な組み合わせによって、従前にはない研究上の新発見・大発見が生まれる可能性があると思われる。後になってみると、当時の読売や朝日新聞などの関係記事を何気なく読んでいた蓄積が、実は今回の調査研究の触媒作用となったのではないかとふと感じる。そう考えれば、戸川の回顧録と筆者の出会いも、まったくの偶然といえない、来たるべきタイミングを有した必然なものといえるのではないだろうか。

[個人研究]

第一高等中学校入学試験科目変更の波紋について

——幸田成友の回顧録から——

谷本 宗生

第一高等中学校入学試験科目の変更が1888年にみられたことは、受験した戸川秋骨の証言でもよく分かるところである。戸川は残念ながら受験の結果不合格となったが、同年の入試を受験して合格したものの1人である幸田成友(1873～1954年)の証言をみておこう。幸田成友は幸田露伴の弟で、帝国大学でお雇い教師リースの指導を受け、後に歴史学者として活躍する人物である。歴史学者としての幸田は無用な孫引きを排し、“原点にかえれ”を強調したといわれる。さて青年期の幸田は、前年1887年の第一高等中学校入試を受験して不合格となって一浪している。以下、幸田成友『凡人の半生』(1948年)所収の「中学生時代」を

抜粋引用する。

自分は、将来多数の人々と共同して大きな仕事の一部分を受持つより、全部若しくは大部分を自分一己の力で成就し得る仕事に従事したい。寧ろ鶏口となるも牛後となる勿れだと少年ながら深く考へた。…現在自分の通学してゐる〔東京〕府立中学は中等教育を授けるのが本旨で、上級学校入学の準備を目的としてゐない。従つて同校を卒業してから、更に東京英語学校・共立学校・又は成立学舎に入り、受験準備をしなければ英・漢・数の三科目を主眼とした予備門の入学試験を通過することは覚束ないと見

たので、折角一年ゐた府立中学を退き、また〔府立中学校英語教師〕西山〔義行〕先生の許を辞して、神田区駿河台淡路町の私立共立学校へ入学するに至った。…共立学校時代は実に身窄しいもので、敷地は狭く、運動場と名付くべき広場も無かつた。…官立府立の規則立つた学校で教育され、朝飯を済ましたら急いで学校へ通ふものと馴らされた自分は、自由奔放な私立学校の風儀とこの午後の課業とに、当分甚だ不安を感じたは止むを得ない。…教師招聘に対する学校の方針は、肩書の有無にあらずして、才能の如何にあつたらしい。英語の宮岡恒次郎・日置益・大浦佐助諸先生が角帽金釦の東大法科大学生であり、体操の細井巖彌先生が黒い笹縁ジャケツ〔ママ〕を着た予備門の学生であつたことは特記に値する。要するに学校及び諸先生の意気込は、本校生徒の上級学校受験者とその及第者の比率が、本校以外の準備校たる成立学舎や英語学校に劣つてはならぬと、痒い所へ手の届くやうに教へ、生徒は上級学校入学が最大の目的だから、寝食を忘れて勉強する。教へる方も教へられる方も、双方真剣だから学業の進歩は著しい。…〔明治〕十九年予備門は第一高等中学校、東京大学は帝国大学と改称し、大学は旧に依つて一校であつたが、高〔等〕中〔学校〕は全国を通じて数校の設立を見るに至つた。然しながら東京の高中で修業する方が、地方の高中で修業するより有利な点があつたので、学生東京集中の風は一朝一夕にして改るべくもなかつた。

上記の幸田の証言は、まさに当時の状況を端的に表しているものと思われる。当時の青年子弟が、大学予備門・第一高等中学校への進学を目指すうえで、受験予備学校と称された私立の学校へこぞって通つた様が

よくうかがえる。ところが、第一高等中学校の入試を重視しながらもいまだ牧歌的であつた受験予備学校の雰囲気が一変する事態が生じることになる。

それは学校で尋常中学の課程に応じ、大いに学科目を増加し、従来の英・漢・数の外に、新に地理・歴史・理化学・体操等の学科を増加したことである。これでは曩に自分が府立中学を退学した意味がなくなるので、頗る進退に躊躇したが、その原因は一高の受験科目が尋中修了の課目に準ずるやう変更されたためと分明し、漸く意を安んずるに至つた。然し何分急激の改正とて、新科目の授業には随分滑稽を生じ、時に愁眉を開くことさへあつた。一例を体操に取ると、肝要の運動場が無い。生徒は校舎と校舎との間の空地に目白押に集り、細井先生が群る生徒を掻分け、廊下へ飛上つて号令を掛けた類だ。…二十一年夏再び一高の試験を受けた。予期の如く同年から受験科目が改り、尋中で修める殆ど全科目に対して試験があつたので、既往と相違し、第三次の試験によつて始めて及落が決した。受験者総数一千六百余人、その中二百五十人ばかりが及第したと記憶する。…

幸田がいうとおり、第一高等中学校の入試科目変更は受験者にとつても、受験予備学校にとつても大きな影響を与えたものと想像できる。正規の中学校を中退してまで、受験に有利になると考えて受験予備学校で学ぶ選択をしたというのに、第一高等中学校入試は尋常中学校で学ぶ諸学科（当分唱歌を除く）を悉皆試業すると決定したことに対して、多くの受験者らは話が違ふと当然憤つたに相違ない。ただし、彼らの受け皿とされた受験予備学校の動きなどについてはさらなる

調査分析が必要であろう。前年の1887年4月の『官報』では、第一高等中学校の入学試験が今後は諸学科悉皆を基本方針としていくことがすでに示されており、驚天動地の事態に戸惑う戸川や幸田ら受験者とは異なり、文部省・第一高等中学校と受験予備学校の間でいったいどのような指示連絡がなされていたのかは興味がつきないところである（「<資料紹介>第一高等中学校と設置区域内の尋常中学校・私立学校との連絡について」『1880年代教育史研究会ニューズレター』7号、2004年4月、参照）。

幸田成友の回顧録を他の回顧録や自伝などのように、

当時の多くの第一高等中学校受験者談と大雑把に捉えてしまっていたならば、1888年入試科目変更の波紋については筆者も残念ながら見逃していただろうと思われる。1つの文献や史資料をいかに分析考察できるかは、研究者自身の問題意識、拘り次第で大きく別れるものといえよう。大いに活かすこともできれば、その逆も然りである。いくつかの断片情報の集積がある時を境に閃きと変わり、たとえ従前手垢のついていた文献や史資料であっても、新たな知見を見出し得ることが多々ある。今回の幸田成友の回顧録は、まさにそのようなものといえるだろう。

[個人研究]

再び森有礼へ——佐藤秀夫氏の所論を素材に——

田中 智子

当研究会発足後12年が経つが、森文政期を森の思想から解放して研究・評価しようというスタンスが、中野実氏を含め、会員間において共有されてきたと考えている。その中で、サブリーダーとしての役目を果たした文部官僚研究の重要性も強調されてきた。

だが最近、長年の(?) 高等学校研究を経て思考は一巡し、「森有礼そのもの」をあらためて研究したいという思いが、筆者の中では強まっている。『森有礼全集』をとりあえずパラパラとめくる機会を増やしたが、本当は一からじっくりと読み直したくてたまらない。

別の必要があって、佐藤秀夫編『続・現代史資料(8) 教育 御真影と教育勅語』I (みすず書房、1994年、以下『御真影と教育勅語』) を手に取った。同氏による「解説」の質の高さ、自身の見解をふまえた収録史料の構成にあらためて感じ入った次第であるが、「勅語」のみならず森の位置づけについても考えさせられる点が多い。

まず、「学校と御真影との出会い」の立案者・推進者は初代文部大臣森であるとされる——森は1888年1・2月頃、今後国家祝日には、学校に教員・生徒たちが集合し、祝日唱歌の斉唱および校長訓話などからなる学校祝賀儀式を施行し、「忠君愛国ノ志気」を生徒たちの内面に育成させるよう示唆した。彼は長い欧米生活を通じ、キリスト教信仰の育成・強化に果たす礼拝儀式の役割、とりわけ音楽と唱歌の及ぼす感性への効果に注目していた。そして、抽象性の高い「国家」を「具象化」させる手段として、ヨーロッパ君主制国家での君主存在からのアナロジーをもって、国家元首である天皇存在の利用に同時に着目した——と。そして、森にあつては、「御真影」=天皇存在は本質的に「国家」の具象化=人格化としてとらえられており、伝統主義的国体論の機軸をなす天皇絶対主義(日本的ロイヤリズム)からは遠い位置にあったと評するのである。このあたりは、森を「機能主義的国家主義者」と位置

づける園田英弘の議論（『西洋化の構造』思文閣出版、1993年）とも通じているといえよう。

佐藤編『御真影と教育勅語』のポイントは、海後宗臣『教育勅語成立史の研究』（1965年）や稲田正次『教育勅語成立過程の研究』（1971年）などの古典的実証研究のように、1880年代以前の「教学聖旨」から説き起こしていないところである。解説では、従来の研究の問題点として、①考察が成立過程に集中していること、②元田永孚一派の主張の一貫した強さを印象付ける結果に陥っていること、③「勅語渙発」によって徳育論争・徳育混乱の時代に終止符が打たれたかのような捉え方がされていること、④戦前全期間中の一貫した「勅語」の「実効支配」を強調するあまり、近現代天皇制の状況変動に対応してきた柔構造性を軽視していること、等が指摘されている。「勅語」交付「以後」を分析対象とし、地域（現場）からの視座により、その効力を相対化していった籠谷次郎の研究視角（『近代日本における教育と国家の思想』阿吽社、1994年）は、佐藤の視角と整合性をもつと考えられ、この巻の月報執筆者が籠谷であることには納得がいく。

そして、『御真影と教育勅語』が具体的に採った方法は、森文政期から史料収録をはじめたことであった。ここに従来の「勅語」成立史観と異なる独創性がある。

これについては、「本格的な近現代天皇制教育は森文政期に発足した」「森文政期における独特な国家主義思想に立つ天皇制的教育」といった説明が加えられている。一方で佐藤は、別の著作で繰り返し強調する「森有礼文政期＝「教育における明治維新」の終末期」という一語も、同じ解説文に組み込んでいる。一見相反する両定義の関係については、残念ながら議論が展開されていない。

また、森文政期の史料として具体的には、唱歌を用いた国家祝日学校儀式の導入、「御真影」の府県立学校への「下賜」に関わる史料とともに、「森有礼の徳育観を盛り込んだとされる『倫理書』全文」が収録されている。『倫理書』研究を行ってきた筆者としては、この編集方針に大きな興味を抱くとともに、佐藤の『倫理書』論、ここに『倫理書』を含めた意図がどこにも詳述されていないことを、これまた残念に思うのである。

とはいえ気を取り直し、上記二点は後進にあえて残された宿題なのであろうと考えることにした。森が存命していたならば「教育勅語」をどう評価したろうか、という究極の課題だとも言い換えられよう。これまでの研究蓄積をよすがに、今後追究していければと決意している。

[図書の紹介]

木野主計『木下鞆村の生涯とその魅力』について

富岡 勝

井上毅研究で著名な木野主計によって木下鞆村（1805-1867）の人となりや鞆村書屋の成立、規模、塾約、授業内容等について本格的に紹介する『木下鞆村の生涯とその魅力—鞆村書屋に集まる廉潔の志士たち—』（木野主計著、熊本日日新聞社、2013年8月15

日刊、1200円+税）が刊行された。

第一高等学校校長・京都帝国大学木下広次について研究している筆者（富岡）としては、広次の実父である鞆村について勉強する必要性を痛感しているところで、大変有り難かった。まだ内容を学んでいる最中と

いう段階なので、書評ではなく、情報交換として、内容の一部を紹介してみたい。

章構成の概略は以下の通りである。

序説

第一 菅茶山の廉塾と頼山陽について

第二 廣瀬淡窓の咸宜園と弟旭荘の廉塾入門について

第三 松下村塾と木下塾の因縁とその有り様

第四 序説の結びに代えて

第一部 木下韓村の人となりと木下塾（韓村書屋）について

第一章 木下韓村の人となり

第二章 『木下韓村韓村日録』の謄録

第三章 韓村書屋（木下塾）の成立ちとその規模

第四章 韓村書屋の塾制と授業内容と門下生の有り様

第五章 韓村書屋の門下生達

第六章 韓村書屋の評価

第二部 江戸における木下韓村周辺の学芸的状况と時習館との関係

第七章 細川斉護の参勤交代に随従しての江戸出府事歴

第八章 木下韓村の江戸出府事歴

第九章 木下韓村・安井息軒・塩谷宕陰が興した江戸での文会の内容

第十章 熊本藩藩覺時習館の教授時代の木下韓村の活動

第十一章 第二部江戸における木下韓村周辺の学芸的状况と時習館との関係の結語

第三部 熊本藩の『影宋本尚書正義』出版と木下韓村の関係

第十二章 藩覺時習館の『影宋本尚書正義』出版の経緯

第十三章 第三部の結語

総まとめ

附録一 木下韓村略年譜

附録二 『韓村書屋門生名籍』藩別塾生名簿

附録三 韓村書屋『門生名籍』中藩別塾生数順位表

現在では木下韓村については、あまり知られておらず、韓村が嘉永元年（1848）に熊本城の近くに開いた韓村書屋の知名度も高くない。しかし、著書は、韓村書屋出身者の一例として、外交官竹添進一郎、学者岡松甕谷、文部大臣井上毅、元老院議員鶴田皓、北海道長官の安場保和、侍従長米田虎雄、九州改進黨領袖の嘉悦氏房、敬神党参謀の齋藤求三郎、民権家宮崎八郎、医学者北里柴三郎などを挙げ、次のように述べる。

門下生は九州全土に及び、四国・中国・遠くは関東・信州など三十九藩百四十名の塾生が入門を願って木下塾を目指して蟬集してきたのである。

（はしがき 4 頁）

韓村書屋の修了生たちは、幕末から明治維新期には江戸期の伝統的な儒学的思考を生かして活発に働いた守旧派の諸氏や、片や明治新政府時代には全く新しい西欧の思想を活躍の原動力となした進歩派の官僚を生んだ事では、前三校の廉塾・松下村塾・咸宜園などの卒業生たちに決して引けは取らなかったのは勿論のことであった。（はしがき 5 頁）

熊本で口さがない人がよく言う保守的傾向の強い学校党の連中や、理論より実学を重んじる実学党

の連中や、敬神崇拜の念が強く、世の中は暗いと言って昼間でも提灯の明かりを灯して歩いたと言う敬神党の連中や、自由民権の思想を持った民権党の連中たちなど色んな主義主張を保持した者が木下塾の出身者の中には雑居して居たのである。言ってみれば好き勝手にものが家、自分が思う儘の行動が取れたと言うことは、其れだけ韓村書屋に学ぶ門人たちには自由が存在していたという証拠になるのである。

(はしがき 5頁から 6頁)

韓村書屋の塾制と授業内容については、例えば以下のようなことが紹介されている。

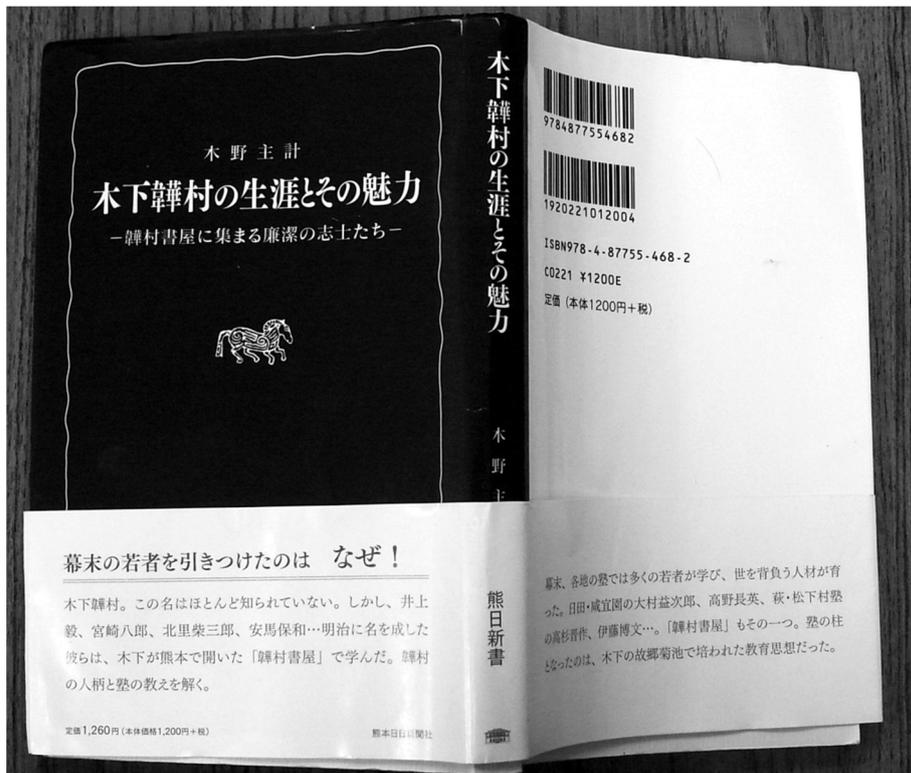
外坪井時代の塾の制度組織を見ると、塾生の寝泊まりする寮には北寮・東寮・西寮の三つが在り、塾を取り仕切る塾長が居り、之を補佐する塾長主事一人を置き、別に手長という古参の塾生を用意した。塾寮に寄宿している生徒は毎月一日と十五日に食費

を払い、塾の学費である謝偽は盆暮の年二回支払う事になっていた。

木下塾の毎日の課業は朝六時に起床し、午前の日課は白衣に袴を着用し、正座して経書(大学・中庸・論語・孟子)を朗読し、午後は白衣を着ず、課業は詩文集と雑書の勉強をした。七ッ時(午後四時)から剣・鎗・弓の稽古を許した。入門したての初学者は塾長が読み書きの面倒を見、年を経て手長となった生徒には塾長が小学(幼童用の修身書)会読を督して勉学を勧めた。入門製の年齢の最低は七歳で、最高は三十一歳であった。

木下塾も安政時代は塾生が多くなり、塾長を六名置いた。一日の課業が訖と自由時間を生徒に与えた。但し、門限は六ッ時(六時)と定めた。塾に通学してくる生徒には「塾会着到」という出席簿があつて、塾長や木下韓村は之に依って個々人の出席状態を把握し、その勉強の進捗状況を確認したのである。

(76頁から 77頁)



引用が長くなってしまったが、本書の雰囲気は伝わるだろうか。なお、嘉永元年(1848)に創設された韓村書屋は、同年木下真太郎(韓村)が藩塾時習館への出講を命じられたことにより、官塾として開設された。官塾というのは、その卒業生の中から藩塾時習

館の居寮生を推薦する資格を有する資格をもつ、公認の塾であり、時習館で教鞭をとっていなければ開設する資格が得られなかったようである（67頁）。

官塾という制度が熊本藩独自のものなのか、韓村書

屋と時習館のカリキュラムなどがどの程度共通していたのか、もしかしたら韓村書屋は、幕末の学問塾の模範例のような存在だったのか、興味は尽きない。

[お知らせ]

研究年報第5号の完成について 10月1日に『一八八〇年代教育史研究年報』第5号が完成し、10月12日（土）開催の中等教育史研究会と10月13日（日）・14日（月）の教育史学会において、三木会員をはじめ、荒井代表・谷本会員・佐喜本会員と富岡で会場での配布作業を行いました。また第2号・第3号・第4号の段ボール4箱にわたるバックナンバーを会場まで送付する作業を田中会員が担当し、これまた段ボール4箱になった第5号を含む残部の保管を佐喜本会

員が担当しました。

今回配布できた冊数は、第5号が約50冊、第2号から第4号が合計約50冊でした。第1号は品切れですが、第2号から第5号は残部があります。ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

なお、本ニューズレターでも改めてお知らせしますが、研究年報は、第5号をもって終刊となります。ご愛読いただき有難うございました。



研究年報第五号の各論考の執筆者名と題名は以下の通りです。

緒言 荒井明夫「一八八〇年代教育史研究会のこれまでの研究成果と今後の研究課題について」

— — — — —

特集 一八八〇年代における高等普通教育と専門教育の再編Ⅴ

論文 神辺靖光「中学校史の一八八〇年代（その五）—中学校教則大綱—」

研究展望 佐喜本愛「第五高等中学校教員の履歴について—教諭を中心に—」

史料紹介 小宮山道夫「千葉県会議事録（明治二十年度）」

史料紹介 荒井明夫「文部省管理山口高等学校・鹿児島高等中学造士館 主要史料の解題」

— — — — —

研究 富岡勝「第一高等中学校寄宿舎自治制導

入過程の再検討（その五）—寄宿舎自治制導入過程から見えてくること—」

研究展望 谷本宗生「東京大学予備門・第一高等学校の学校医（摂生室医員）の存在について」

書評 田中智子「中野実『近代日本大学制度の成立』再読—刊行十年に際して—」

次号(44号)原稿締め切りについて 次号ニュー

ズレター（第44号、2014年1月15日発行予定）の原稿締め切りは、2013年12月31日です。奮ってご投稿ください。

また、本ニューズレターは第45号（2014年3月31日発行予定）が最終号となります。こちらの締め切りは、2月15日です。原稿の準備をお願いします。なお、この最終号では、研究会活動記録（第23号以降）とニューズレター目次一覧（第25号以降）を掲載予定です。

「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第43号 2013年10月15日発行
<研究会連絡先・原稿送付先> 富岡 勝 「1880年代教育史研究会」事務局 〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室 気付
E-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
<HP> http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/